

---

# 一つだけ、誇れるもの

ますの ずず

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

一つだけ、誇れるもの

### 【Nコード】

N4012I

### 【作者名】

ますの ずず

### 【あらすじ】

わたしには、一つだけ、誇れるものがある。絶対人には言えない、悪趣味な特技。  
軽蔑しないで、わたしの友達。  
死なないで、わたしの友達。

## (前書き)

手紙形式のショートショートです。

読みにくいかも知れませんが、最後までよんで頂けると嬉しい。  
記念すべき初投稿。

わたしには、一つだけ、誇れるものがある。絶対人には言えない、悪趣味な特技。胸のおくに秘めていた・・・という言い方は好きではないが、このことに関してはそれがぴったり当てはまる。ずっと秘めている。3年前からだと思う。わたしは”記憶”とか、”思い出”とかをほじくりだすのが嫌いだ。だから間違っているとしても、文句は言わないでほしい。

あとこの手紙を読んだら、すぐにこの紙切れを燃やしてほしい。あなたのかっこいいライターで。

忌々しい、”記憶”か”思い出”であるから。

あなたも知っているはず。同じクラスだったから。ああ、今思い出した。確かに3年前だ。入学式から少したったあと、ちょうど今頃のこと。わたし達は仲が良くてよく2人ですごしていた。まわりのクラスメイトも気の合う子を見つけて、新しい生活を楽しんでいた。

でも世の中には気の合う子や、入部したての部活に精を出すこと意外に独特な楽しみを持つ人がいるものだ。本当に、迷惑なことにさらに迷惑なことに、そういう人の中にわたし達と同じ学校から来た子がいた。分かるでしょう？個人名は出さないけれど。キヤーキヤー騒ぐのが好きで、人を悪く言うのと校則を破るのが得意な、あいつ。わたし、一時期本気で殺そうとしてたのあなた知ってる？そう、その子。その子がわたしを薦めた。その独特な楽しみにね。わたしがこの学校に来る前のあだ名が「火星人」だったことも、教室でやらかした大へまも、わたしが好きだった子のことも。

で、結局わたしはあの人達のお楽しみのお道具になったわけ。

毎日毎日毎日毎日毎日・・・わたしは普通に家に帰れたことなんてなかったでしょう？制服に大きなシミができたり、

だれかの悪意で傷を作ったり。学校は苦痛でしかなかった。でも毎日通った。痛い思いをしても酷いことを言われてもね。死ぬならあいつ等の前でつて決めてたこともあるし、なにより、言いにくいことではあるど・・・。

楽しかった。すごく。

可笑しかった、でもあるけど。他の子達の顔色を伺いながらわたしに傷を作る同じ学校から来た子も、毎日同じことをわたしに言つて何が楽しいのか分からないけど大笑いしてる沢山の女子も。ちらちらこつちを見ては周りの男子と何か言い合う男子達もね。

どう？滑稽だったと思わない？わたしずっと笑つてた。心の中では爆笑。あまり表には出さなかったけど。悲痛そうな顔をしていた。あなたが知っていたかは知らないけど、あの人達のお楽しみが他の人に移行したときは正直残念だった。当事者のほうが楽しいに決まってるから。あの人達の楽しみだけではない、わたしの楽しみでもあったのかもしれない。

もう、こちらではそういうことがないし、詳しいことは思い出せない。

だから言ったでしょう？嫌いなもの、過去を振り返るのは。阿呆みたいでしょう？あのときあんなことがあった、ほらあのときは・・・。わたしがドラマ嫌いなのは回想があるから。楽しめない、あんなもの。小説も。読んでたら途中で馬鹿馬鹿しくなる。ああ、この手紙も嫌になってきた。早く終わらせたいけど、まだわたしの誇れるものを教えてなかった。

前の手紙で「自分の誇れるものを教えて」って書いていたけど、そんなこと知つてどうするの？あなたの興味がどこに向いているのか、わたしには分からない。でも、この際だから答えようと思う。自分の誇れる唯一のもので、人に言えない唯一のわたしの秘密。遠く離れたあなたになら言つても構わない。軽蔑しないで、わたしの友達。

わたしの誇れるものはあのときの経験が活きている。具体的には

あの人達の目の前で死のうと思っていたことと、殺したいと思っていたこと。察しのいいあなたならもう分かったんじゃない？

わたし、人の死亡動機が大体わかる。

どんなに幸せでも心の何処かに死にたい気持ちつてあるものじゃない？きつとあなたもそうだと思うけど。この特技の存在に気付いたのはあのおとき、他のひとに移行するほんの少しだけ前。あのおひと達の中に一人眼鏡の子がいたの、覚えてる？あの子が死にたがっていたのが、わかった。日頃の挙動から死亡動機もわかった。そのときの死亡動機は毎晩みる夢のこと。どんな夢かまではわからないけど。

夢。夢といえ、あなたはわたしの夢をみたから手紙を書いたと言っていた。ねえ、どんな夢をみたの？二人で笑い合っているような麗しい夢ではなかったはず。もしそうなら、あなたのこと。手紙なんて書かずにため息を吐きながら煙草を吸って、寂しくて少し泣く・・・妥当なところ。でも違った。わざわざ手紙を書いて、何気なさを装って。

ねえ、あのおときのわたしを夢にみたの？悲痛な顔をしてあの人達にいいようにされるわたしだったの？酷いことを言われ、傷を付けられた汚い制服のわたし？

あなたが気に病むことなんてない。優しいあなたはどうしても気に病んでしまうと思うけれど、あなたの所為じゃないあのおときのこと。あなたがあの人達に言いつけられてわたしに酷いことを言った日に、泣きながら電話してきてくれたのをわたしは覚えてる。嬉しかった。

だからお願い。便箋二枚の中のアナタの言葉で、わかってしまった。悲しいかったけれど。あのおときわたしを見捨てたからといって死んだりしないで。わたしは恨んだりしていないから、あなたのことを大切な友達だと思ってるから、遠く離れたあなたに逢えなくてすごく寂しい、今も。こちらに来てから手紙を書いてくれたのはあなたと家族だけ。

死なないで、わたしの友達。

こちらに来てからあなたの様な友達は出来ない。だから死なないで、お願い。わたし、今あなたが死んでしまったらそれこそわたしも死んでしまう。優しいあなたと、悪趣味な特技を持つわたし。どちらかが居なくなってしまうたらどうするの？きつとわたしもあなたもおかしくなるでしょう。二人ともとても弱いから、片方だけになっちゃっては押し潰される。

次の手紙でわたしを置いて死なないと約束して。待ってるから。

五月二十三日

あなたの

友達

追伸 長くなってしまっでごめん。つぎは近況をかくから。楽しみにしている。

(後書き)

最後まで読んで頂けて嬉しい。ありがとうございました。  
実体験ではありませんので、描写に不足があるかとおもいますがそれは  
日々精進。

次に期待してください。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4012i/>

---

一つだけ、誇れるもの

2010年10月15日07時14分発行